

# 学力問題からみた塾とその機能に関する研究

佛教大学教育学部 原 清 治      佛教大学大学院修了生 山 崎 瞳

## 抄 録

近年の「学力低下論争」において、その中心にあった議論のひとつが子どもたちの学力の二極化であった。ゆとり教育によって、自主的に学習に取り組む姿勢が身についた子どもたちがいる一方で、学力が低下し、「学びから逃走する子どもたち」が生み出されているというのである。本稿では、この学力の二極化現象において、学力が低下していない子どもたちの層に注目した。今日では塾に通うこと（通塾）が、学力を保障するうえで大きな影響力をもつことは先行研究より明らかであるが、塾に通う子どもたちの意識に注目した場合、時代の変化につれてその実態も大きく変化していたのである。

インタビュー調査の結果、塾に通う子どもたちのなかには「塾がづらい」と感じている傾向

もみられたが、それでも驚くほど長期に渡って通塾を続けるのが一般的であることが指摘された。その背景には、塾に通わない、いわゆる「勉強のできない子」たちとは明確に区別されたいという考えがはたらいているからであった。また、これまで塾がもち合わせていた「補習」型の機能が、学力低位の子どもたちから、学力上位群のなかにいる下位層（文中では「偽装エリート」群と表記）へと対象を変えており、塾の機能そのものにも変化がみられ始めていることも考察された。通塾する子どもたちの層の変化は、親がわが子を強制的に通塾させることが少なくなったことと無関係ではなく、親のなかにも子どもたちと同様に、教育に対する価値の二極化傾向が進行していると考えられる。

## I. 学力低下の現状および研究の目的

総合的な学習の時間が創設され、従来の教育内容が3割削減された学習指導要領が改訂されて、3年の月日が経過しようとしている。この改訂にともない、教育界では学力論争が世間の注目をあびたことは記憶に新しい。子どもたちの学力が低下している傾向にあることは多くの先行研究からも明らかとなっている。ここではまず、どのような子どもたちの学力がどの程度低下したのかについて先行研究を整理し、その実態をつかみたい。図1は、荻谷剛彦グループ

が2001年におこなった学力調査における中学校数学の得点分布を示したものである。（図1参照）

これをみると、89年の調査と比べて、子どもたちの学力は全体的に低下したのではなく、60点以上のグループにいる「できる子どもたち」と、30点以下のグループの「できない子どもたち」との差が大きく開き始めたことがうかがえる。子どもたちのなかに、勉強ができる子とできない子がはっきりと分かれてしまったのである。以前ならば子どもたちの学力は正規分布に近い形状をしており、平均点付近に大きな山を

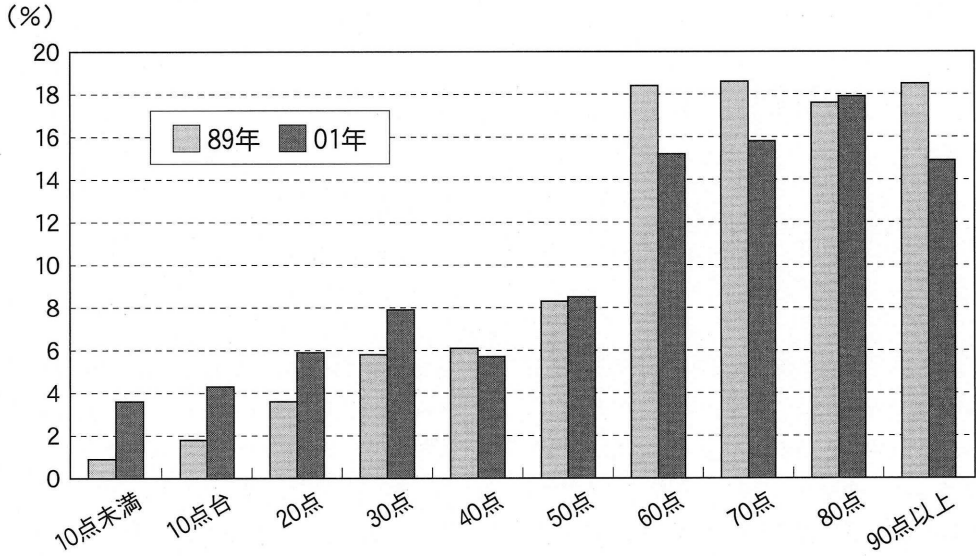


図1 中学校数学の得点分布の変化

(資料) 荻谷剛彦他『調査報告「学力低下の実態」』岩波書店 2002 p.16

作る右肩上がりの分布をみせていた。しかし、最近の子どもたちは、できる子とできない子の学力格差が大きく、できない子どもたちの学力低下が進んでいることがこのグラフから読み取れる。佐藤学(2000)は、このような勉強のできない子どもたちのなかに学習にまったくなじまない子どもたち、すなわち「学びから逃走する子どもたち」が多く存在することを指摘している(注1)。そうした子どもたちには、学ぶことに対する「ニヒリズム」や「シニシズム」が浸透しているために、どうして勉強しなければな

らないのかという問いに対して明確な意味を見出せずにいるのである。

それでは、どのような子どもたちの学力が大きく低下したのであろうか。次の表1は通塾別にみた子どもたちの教科別平均得点を比較したものである。(表1参照)

これをみると、89年調査では塾に通う子どもと通わない子どもの間には中学校数学(13.3点)をのぞいてあまり差が見られなかったが、01年調査ではその差が小学校算数をのぞいて大きく

表1 「通塾」「非通塾」別の平均点の比較

	89年			01年			89年と01年の差	
	通塾	非通塾	差	通塾	非通塾	差	通塾	非通塾
小学校国語	80.9	78.0	-2.9	75.9	69.6	-4.5	-5.0	-8.4
小学校算数	84.6	78.9	-5.7	73.0	67.5	-5.5	-11.6	-11.4
中学校国語	74.5	68.3	-6.2	71.9	63.2	-8.7	-2.6	-5.1
中学校数学	75.8	62.5	-13.3	74.5	54.5	-20.0	-1.3	-8.0

(資料) 荻谷剛彦他『調査報告「学力低下の実態」』岩波書店 2002 p.18

なり、とくに中学校数学ではその差が20点になっている。また、塾に通う子どもたちの学力は、小学校算数を除いてその低下が5点以内に収まっているのに対して、塾に通っていない子どもたちはどの教科も5点以上低下していることがわかる。したがって、学力が落ちている子どもたちの多くは塾に通っていない子どもたちであることがわかるだろう。図1では学力の高いグループは得点を維持していた一方で、得点の低いグループの割合が増加していた。この表1と重ね合わせると、得点あまり低下していない高い得点のグループは塾に通う子どもたちであり、得点が大幅に下がったグループは塾に通わない子どもたちであると考えられる。

こうしてみていくと、塾に通っている子どもたちの学力は低下していないことがわかる。塾に通っている子どもたちには、塾に通っていない子どもたちのような大きな学力の低下を見出すことができないからである。しかし、学力に影響を与えている要因には、塾に通うことだけではなく、子どもたちの勉強時間や宿題の有無、性別などからの影響も考えられる。このような複数の要因のなかで、塾に通うことと学力との関係は、どの程度の影響をもつのであろうか。

表2は1989年および2001年の中学校数学の正答率を従属変数とし、学力に影響を与える各項目を独立変数とした重回帰分析の結果である。(表2参照)

この表からは、3つの点を指摘できる。ひとつめは、89年においても01年においても、塾に通うことは子どもたちの学力にもっとも大きい影響を与えていたことである。学力に対する通塾の標準化係数( $\beta$ )は89年では0.269、01年では0.338と、どちらも他の項目の数値より高くなっている。したがって、この項目のなかで学力に影響を与える最大のものは、昔も今も塾に通っているかどうかということである。ふたつめに、塾が学力に与える影響については、01年のほうがより強くなっていることである。通塾の標準化係数は89年よりも01年のほうが高い。したがって、現在塾に通っている子どもたちは、以前に塾に通っている子どもと比べて、学力が高くなっていることがうかがえる。最後に、89年において統計的に有意であり、学力に対する影響が強かった勉強時間が01年では統計的に有意ではなくなり、影響も弱くなっている点である。それにかわって、01年ではまったく勉強しない子どもたちが学力に対して負の影響

表2 中学校数学正答率の変化

	1989年			2001年		
	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
定数	44.436	2.004	***	42.326	2.616	***
男子	0.656	0.867	0.015	-1.619	1.309	-0.033
読み聞かせ	2.785	0.944	0.06 **	3.317	1.414	0.063 *
通塾	11.614	0.992	0.269 ***	16.619	1.638	0.338 ***
宿題	6.591	0.723	0.199 ***	6.295	0.921	0.194 ***
勉強時間	0.064	0.012	0.127 ***	0.007	0.019	0.011
全く勉強しない	-0.092	1.518	-0.002	-5.785	2.077	-0.101 **

\* 従属変数：89年数学スコア、N=2089、F=71.134、Signf=0.000、Adj R<sup>2</sup>=0.168

\* 従属変数：01年数学スコア、N=1133、F=51.249、Signf=0.000、Adj R<sup>2</sup>=0.210

(\*\*\* p < 0.01, \*\* p < 0.05, \* p < 0.1)

(資料) 荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店 2004 p.147

を与えていることがわかる。これは、以前ならば塾に行っていなくても勉強時間を増やすことで学力を高めることが可能であったが、現代においてそれは難しくなったことを示している。逆に塾にも行かず家でもまったく勉強しない子どもたちの学力は近年になって大きく低下していることがわかるのである。

このように、学力低下という現象はすべての子どもたちにふりかかった問題ではなく、あまり学力の高くなかった子どもたち、すなわち塾に通っていない子どもたちに顕著に見られる問題であることが分かった。子どもたちのなかには学力がそれほど落ちていない学力上位層と大幅に落ち込んだ学力下位層に分かれ、その格差が大きくなっていることが考えられる。そして、近年における学力論争では後者の学力下位層に注目し、彼らの学力を保証するためには、どのような教育施策が必要か、学校教育はどうあるべきか、という部分に焦点がむけられたのである<sup>(注2)</sup>。

本研究では、このような学力が大幅に低下した子どもたちではなく、逆にこの10年近くの間、学力があまり低下しなかった塾の子どもたちに注目したい。なぜ彼らの学力は低下しなかったのであろうか。

学力の視点から塾をみた場合、塾には①進学目的の機能と②補習機能の2つに分かれていると考えられていた。すなわち、進学目的の子どもたちは学校の勉強だけではおいつかない入試勉強をするために塾に通っている。ゆえに彼らの学力は一般の子どもたちよりも高くなる。反対に、補習目的の子どもたちは学校の勉強についていくことができないために塾に通っていると考えられる。ゆえに彼らの学力は一般の子どもたちよりも低くなる。したがって、前述した図1の学力分布の60点以上にいる子どもたちが通う塾が①の機能が強い進学塾であり、逆に40点以下にいる子どもたちが通う塾が②の機能

が強い補習塾であり、塾に通わない子どもたちはその中間にいると考えられていたが、本当にそうなのだろうか。現代において塾に通うことは、以前よりも学力に大きな影響を与えている、という結果から考えると、前述した2つの塾の機能に変化が見られるのではないだろうか。

塾が近年になって付与された新たな機能や役割は、子どもたちの学力に対してどのような影響を与えているのだろうか。

## II. 学習塾の定義

学習塾の先行研究として代表的なものに小宮山博仁(2000)の研究がある。(注3)小宮山は、塾を機能別に分けた場合、4つに分けられると定義した。

- ① 進学塾
- ② 補習塾
- ③ 総合塾
- ④ 教育理念塾

①の「進学塾」は、前項でもふれた子どもたちの進学目的を主とした塾である。この塾に通う子どもたちは高い進学意識をもち、学校で学習した内容よりもっと難しい内容を勉強するために塾に通っている。また、一般的に認知されている塾の半分はこの部分にあたる。それに対し、②の「補習塾」は進学塾とは異なり、学校の学習についていくことができない子どもたちを対象におこなう塾である。この塾に通う子どもたちは、学校で学習した内容を再度学習し、反復するために塾に通っている。したがって、学校の教科書以外の範囲を学習することはほとんどない。主に子どもたちに学習する習慣をつけさせることを目的としているところが多く、学校と連携して子どもたちを育てようという傾向が強い。③の「総合塾」は前述した進学塾と補習塾の機能を両方を有した塾を指し、大手とよばれる塾の多くはこのタイプである。進学志

向の子どもも学校についていけない子どももどちらの子どもたちもこの塾に通うため、この塾に通う子どもたちの学力分布は広範にわたる。最後に、④の「教育理念塾」は受験のためだけの勉強をおこなうのではなく、全人教育を目指している塾である。ここでは学校では教育の対象からはずされがちな不登校の子どもや学力が非常に低い子どもを積極的に受け入れている。また、明確な教育理念をもった経営者が直接子どもに指導する機会が多いことも、この塾の特徴である。

このようにひとくちに学習塾といっても、その役割は多岐にわたっており、塾に通う子どもたちの学力も同様に多種多様であることがわかる。それでは、実際に塾に通う子どもたちはどのくらい存在するのであろうか。

図2はベネッセコーポレーションが1990年から継続しておこなっている調査の一部から抽出した、中学生における通塾率の推移を表している。これをみると、通塾率はこの15年間の間に若干の増減はみられるものの、約半数近くの子どもたちが塾へ通っていることがわかる。また、地域別にみたときには、これよりもっと高い

通塾率を示す地域があると考えられる。したがって、中学生の通塾率は、トロウ (M.Trow) の大学進学モデルで示すところのマス段階からユニバーサル段階へ移行しようとしていることがわかる<sup>(注4)</sup>。ゆえに、現代の子どもたちにとって、塾に通うことは学力的に優れた子どもだけが行くところではなくなっている。前述した小宮山によると、日本がバブル経済に突入した1980年代後半から1990年前半にかけて塾の事業所数が2倍に増えたことやとくに進学塾が増加したことにふれ、この時期に塾がもっとも過熱していたことを指摘している<sup>(注5)</sup>。

この時期は経済的に豊かな家庭が増え、子どもを塾にやるだけの余裕が出てきたことによる影響と考えてよいだろう。しかし、図2をみてもわかるとおり、バブル経済が破綻し、長期の不況を迎えている現在においても通塾率は下がっていない。そればかりか、2004年の通塾率は47.1%と大きく増加している。そして、塾に通う子どもたちの学力は、前述したように、以前と比べて塾に通っている影響を大きく受けている。このように時代が変化しても、ある一定の子どもたちに対して学習をさせる塾はどのよ

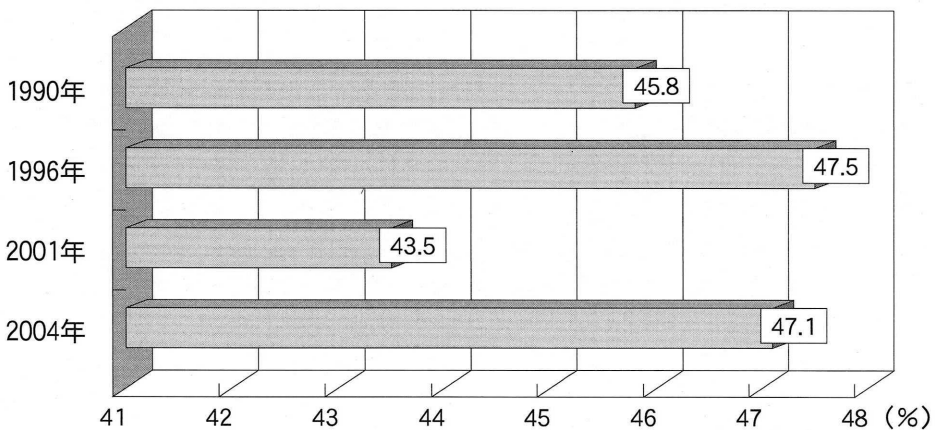


図2 中学生における通塾率の推移

(資料) ベネッセコーポレーション「第3回学習基本調査」(2002)および「第1回子ども生活実態基本調査」(2005)より作成

うに変化したのであろうか。とくに、以前の補習塾に通う子どもたちの多くは、単純に親の強制によって通わされていた場合が多かったと考えられる。なぜならば、一般の子どもたちよりも学力が低いわが子に少しでも学力をつけさせたい、と考える親が多かったと考えられるからである。しかし、現代において、子どもたちが塾に通う理由は親の強制によるものだけと考えることは難しいのではないだろうか。なぜなら、親によって強制的に通わされているとしても、子どもが塾に行くことに強い抵抗を示すならば、現在の不況によって経済的な負担を軽減したい親としては、子どもを塾に行かせることに疑問を感じるからである。したがって、どのような子どもであっても、「塾に行きたい」と思う理由が塾にはあるのではないだろうか。それは塾に通う子どもやそこで経営や指導をおこなう指導者や講師によってどのように認識されているのであろうか。次節では塾に通う子どもたちや塾で学習を教える塾講師や経営者に対してインタビュー調査をおこない、現代の塾は以前に比べてどのように変化しているのか、塾に通う子どもたちの塾に対する意識を中心に考察を進める。

### Ⅲ. インタビュー調査の概要および考察

#### 1. インタビュー調査の概要

インタビュー調査の概要は以下の通りである。

【調査対象】 2005年2月～10月

【調査対象】 小宮山の分類に属するそれぞれの塾に通う生徒28名、塾で教える講師および経営者15名

	総合塾	補習塾
生徒	15	13
講師および経営者	8	7

【調査方法】 個別による面接法

#### 2. インタビュー調査の分析結果

それでは、インタビュー調査の結果から塾の役割変化について明らかにしていきたい。

##### 1) 塾に通う生徒に対するインタビュー

まずはじめに、塾に実際に通う子どもたちからのインタビューを考察したい。彼らはどのような経緯で塾に通い、在籍するようになったのだろうか。また、どのような子どもたちが塾に通っているのか、どうして塾に在籍し続けるようになったのかについても分析を進めたい。

Q：なぜあなたはこの塾に入ろうと思ったのですか。

A：やっぱり学校の成績が落ちたから。最初はべつに塾にこんかっても普通に平均くらいの点が取れてたのに、ものすごく悪くなったし、塾に行こうかなって。

B：もともと成績はあんまり悪くなかったけど、友達に誘われてきた。学校でも仲いい子やったし、この子といっしょやったらええかなと思った。

C：別に塾なんて行きたいと思わなかったけど、親が「あんたこのままやったら高校もいかれへんで」っていわれてきた。

以上のように塾に入るきっかけは以上の3つの意見に大きく分かれた。すなわちAのように学校の成績が悪くなったために自分から塾にやってくる子ども、Bのように友達や先輩に誘われて塾へやってくる子ども、Cのように親にいわれてしぶしぶ塾へやってくる子どもの3通りである。彼らはきっかけこそさまざまであるが、それぞれ同じ塾で勉強をしている。それでは、彼らは塾での学習に対してどのように考えているのだろうか。

Q：この塾で勉強するのは楽しいですか。それ

ともつらいですか。

- A：宿題とか多いけど、学校よりも進むスピードが遅いし、ついていかれへんと思ったら、先生にゆったらとまってくれるから安心する。ここで勉強するのはそんなにいややない。うちは個別やから学校の範囲よりも遅いけど、やっと勉強がわかってきた。
- B：家におっても勉強する気になれへんから、こうやって友達と勉強するほうがやる気が出るし、わからんところがあつたらすぐ先生に質問できるからいいと思う。あと、学校以外の友達ができるんはすごいうれしい。うちは帰宅部やから学校の友達少ないし。
- C：宿題やってこうへんとめっちゃめっちゃおこられるからはっきりにってしんどい①。クラブもきつくなってきてるからあんまりやる気になれへん。先生には「何で宿題やってこうへんねん」っていわれるけど、日曜とかクラブで時間がなかったら、勉強でけへんねん。

以上のように多くの子どもたちにとって塾の勉強は「ためになる」「がんばれる」と答える一方で、Cが下線部①で述べたように、塾の勉強に嫌気がさしている子どもの数は少ない。Cはその理由としてクラブ活動をあげているが、とくにクラブ活動などをしていない子どもにもこのような発言があった。AやBのように、塾での勉強が自分にとって必要だと自覚している子どもたちは進学意識も同様に高い。なぜならば、彼らは「なぜ勉強しなければならないか」ということに対する答えを塾という場を通して感じており、学習の意味を見出しているからである。

しかし、Cのような子どもたちはそのような学習の意味を見出していないため、もっとも塾になじまない子どもたちであると考えられる。したがって、彼らは塾で積極的に勉強をしよう

というわけでもなく、「塾での勉強はしんどい」と自覚している。しかし、彼らの多くは口では「塾はいやだ」といつつ、塾をやめようとはしない。前述したCも中学に入学してから2年近く塾に通っているが、塾をやめてはいない。それでは、なぜ彼らは塾をやめないのだろうか。とくに、「塾の勉強はしんどい」と答えた子どもたちは、なぜ自分で自覚できるくらい塾の勉強が好きではないのにもかかわらず、塾に在籍し続けるのであろうか。

- Q：塾をやめたいと思ったことはありますか。
- C：最初のころは塾やめよっかなって思っただけど、いまはあんまり。なんでっていわれると困るけど、もしやめてもうたらまたアホになってまうんがわかる②し、アホになると塾で怒られんのとどっちがましかなって思ったら、塾のほうがええかなって。
- D：……思ったことないなあ。ここにおつたらいつでも友達と会えるし、勉強するんはしんどいけど先生はいい人やと思うし、学校よりも塾のほうが気楽におれる③感じがする。なんとなく。
- E：全然思わへん。学校におけるやつアホばっかやもん。話してもおもしろないし、レベルが一緒やと思われんがむかつく④。絶対塾でおるやつのほうが気が合うし、イライラせえへん。勉強は嫌いやけど、塾辞めたいとは思わへんわ。

ここでは、塾の勉強を「しんどい」と答えた子どもたちに対して「塾をやめたいかどうか」という質問を投げかけたが、塾をやめたいと考えている生徒はほとんど見受けられなかった。Cのように塾に来た当初は塾をやめたい、と考える子どもがいたが、学年が進むにつれて、塾をやめたいとは思わなくなっていた。なぜ塾を辞めないのか、と聞くと下線部②のように辞め

てしまったら学力が落ちてしまうことを危惧していたり、下線部③や④のように学校の友達に対して息苦しさや苛立ちを感じていたりすることがわかった。このように、学校に対する息苦しさや苛立ちはどこから生まれるのであろうか。インタビューをおこなった塾に通う子どもたちは、ほぼ同一の学校から通っている子どもが多く、彼らの人間関係は比較的円滑であると講師や経営者は話していた。したがってEが述べるような学校の「ヤツ」とは、塾に通っていない子どもを指すと思われる。このように考えると、子どもたちが塾をやめたくない背景には「学力が落ちるから」という単純なものから、「ヤツ」とは一緒にされたくない、すなわち「学校にいる学力の低い子どもと同一に見られること」を忌避しているのではないだろうか。下線部④のように、同一視されたくないという意識は、他の塾に通っている子どもを指すとは考えにくいからである。このようにみていくと、塾に通う子どもにも学力分布と同じように二極化が見られる。すなわち本当に学力も高く、進学意識も高いAやBといった「進学エリート」といえる層と、彼らよりも学力や進学意識の劣るCの「偽装エリート」ともいうべき層である。しかし、それは学力による単純な二極化ではなく、塾に行くことを肯定的にとらえている子どもと、塾に行くことで学力下位の子どもたちとは切り離されていた子どもといった意識の二極化ではないだろうか。

## 2) 塾で子どもたちを教える講師や経営者に対するインタビュー

それでは次に、実際に塾で授業を教える講師や経営者に対してインタビューをおこなった。以前の子どもたちと比べて、現代の子どもがどのように変化したと彼らは考えているのか、考察を進めた。

Q：塾では以前と比べてどのような子どもたちが増えましたか。もしくは減りましたか。

I：うちは進学塾やから、昔は本当によくできる子だけが入ってきました。当時は入塾テストなんかをしてましたし。けど今はそうじゃない子どもも入ってきてる⑥なあ。大体クラスで真ん中くらいの子どもが増えたように感じる。逆にものすごくできる子は減ったかな。けどそれは減ったってわけやなくて、いろんな学力の子を受け入れんと経営がなりたたへんから、ふつうの子を入れるようになったからそう感じるだけかもしれん。

J：そうやなあ、めっちゃできへん子は減った⑦かな。昔やったらそれこそ子どもが夜に遊ばへんように塾に入れてるような子がおった。うちが補習塾やからなおさらかな。それいうのはものすごい減った。勉強ができへんところは変わらんかもしれんけど、今の子は比較的口では反抗するけど、いわれたことはやってくるし、テストのときは「補習してえや」って生徒から頼まれることが多くなったな。

K：うーん、良くも悪くも普通の子が多くなった⑧気がする。うちは集団で授業する関係で学力でクラスを分けてるから余計そう思うんかもしれんけど、前やったら上のクラスと下のクラスやったら学力とか授業態度とかがもう雲泥の差やったけど、今はそこまでひどくない。どちらかといったら下のクラスでそんなにやる気のない、まあ言葉の表現は悪いかも知れんけど、授業の邪魔するような子が少なくなった感じ⑨がする。

これを見ると、講師側からみた塾に通う子どもたちの変化は、大きく2つに分かれると考えられる。

ひとつは下線部①や③のように、幅広い学力



の子どもたちを受け入れることで、進学塾といわれるような塾のなかにそれほど高い学力ではない子どもたちが増えていることである。このような意見はとくに進学クラスを担当する講師に多く見受けられた。一般に進学塾は学力の高い子どもたちが学校では習わないような高度な知識を得るために通うところだと考えられているため、学力のあまり高くない子どもはいないような印象を受ける。しかし、学習指導要領が改訂する以前の通塾率が落ちていたことから、塾の経営が学力の高い子どもたちだけで成り立っていた時代は終わり、さまざまな学力の子どもたちを塾は受け入れざるを得なかった。それは進学塾においても例外ではなく、今までならば受け入れることができない子どもたちが増えてきたことがうかがえる。

もう一方で、講師たちは下線部②や④のようにまったく勉強できないような学力の低い子どもたちが減ってきたことも指摘している。こちらはとくに補習塾の講師に多く見受けられた。補習塾では昔から幅広い学力の子どもたちに対して勉強を教えていたが、そのなかから本当に親の強制だけで通わされていたような子どもが減っているのだ。以前ならばまったく勉強する気のない子どものために、授業が進まないこともしばしばあったが、そこまで授業を妨害するような子どもは減ってきていると講師たちは述べていた。これは、たとえ幅広い学力の子どもたちを受け入れる補習塾であっても、学力分布の最下位にいるような子どもたちが減っていると考えられる。なぜならば、彼らは塾に来たいとは考えず、以前ならばとりあえず塾に行かせて勉強させよう、と考えるような親も減ってきたからではないだろうか。つまり、子どもたちが二極化しているのと同様に、親の意識も二極化しているため、以前ならば「こんなに我が子の学力が低いのはまずい」と考えていた親が減り、「学力が低くてもいいじゃないか、もっと

それよりも大事なことがある」と考えるような親が増えてきたことと無関係ではないと考えられる。したがって、親の強制によって塾に通うような子どもたちが減り、結果的に子ども達は自分の意思で塾に通っていると考えられるのである。

講師のインタビューと子どもたちのインタビューとを総合して考えられることは、塾に通う子どもたちが学力分布の両端に集中していた時代は終わり、現代において塾に通う子ども達は学力上位にいる子どもたちに集中しつつあることだ。これは補習塾においても例外ではなく、以前に比べて授業を壊してしまうような生徒がいなくなったという講師の答えや、「塾はいややけど辞める気はない」と答えた生徒の答えからも推測できる。塾に通う子どもたちのなかから親によって強制的に塾に通う子どもたちの数は全体を見たときには少なくなり、それにかわって以前ならば塾に通わなかった学力の中間層が増加したのではないだろうか。彼らはあまり塾の学習に意味を見出していないが、現在の学校教育では学力上位にとどまることが不可能であることを、学校にいる塾に通わない子どもから感じているために、塾にやってくるのではないだろうか。ゆえに、塾に通うことが以前に比べて学力に対して大きな影響をもち、子どもたちの通塾率を上げていると考えられるのである。

#### IV. まとめ

それでは、以上考察してきたことをまとめて結びにかえたい。

最初に、子どもたちに対するインタビューから得られた知見を整理してみたい。結論からいえば、塾に通う子どもたちのなかに学力のさらなる二極化ともいえる現象が見られたのである。すなわち、学力分布において学力上位（A層）

の子どもたちのなかには、「進学エリート層」といわれるAa層と、それより成績低位の「偽装エリート」とも呼ぶべきAb層が存在したのである(図3参照)。

インタビュー調査の結果からも、塾に通う子どもたちには本当に学力が高く、進学意識も高い「進学エリート層」がいる一方で、彼らより学力も進学意識も低い「偽装エリート層」が存在することを指摘できた。彼らは必ずしも学校の成績を上げるために塾に入ったわけではない。しかし、彼らは長期間塾に居続けており、塾をやめたいとは考えていない者が多い。Ab層の子どもたちになぜ長期にわたって塾に通うのか問うたところ、その多くは「塾にいない子どもと一緒にされるのは嫌だ」と答えていた。つまり塾に行っていない子と自分たちは違うという差を明確にもちたいという意識が、Ab層の子どもたちを長期間塾にとどめる、といったメカニズムがあることが明らかになった。

次に、塾経営者および講師に対するインタビューから得られた知見を整理してみたい。これも結論からいえば、現在、塾に通う子どもたちは、以前と比べて進学塾でもそれほど学力の高くない子どもたちが増え、補習塾では極端に

学力の低い子どもたちが減ったことがあげられる。こうした現象の背景には、進学塾において前述した「偽装エリート」の割合が増加したことと深い関係があるといえよう。彼らは以前ならば進学塾には通うことのできなかった存在である。しかし、少子化や不況などの影響で進学塾が受け入れる子どもの学力幅を広くせざるを得なくなった結果、「僕は進学塾にいつている」という矜持をもつことで、塾の勉強には必ずしも満足していなくても、塾には通い続けようと思っていると考えられる。一方で、補習塾は学力によってクラスを分けたりすることがなく、入塾テスト等をおこなわないにもかかわらず、学力の極端に低い子どもが減少した。以前ならば、学力の低い子どもはその親が「わが子を何とかしてほしい」といって塾に強制的に通わせることが少なくなかったことが講師のインタビューにより明らかになっている。しかし、現代の子どもたちのなかで親から強制的に通わされる子どもの数は少なくなりつつある。塾に通うことで学力下位の子どもと一線をおきたい「偽装エリート」の増加と、「わが子を何とかしてほしい」と訴えるような親の減少というメカニズムが、最近の塾事情を大きく変えつつある

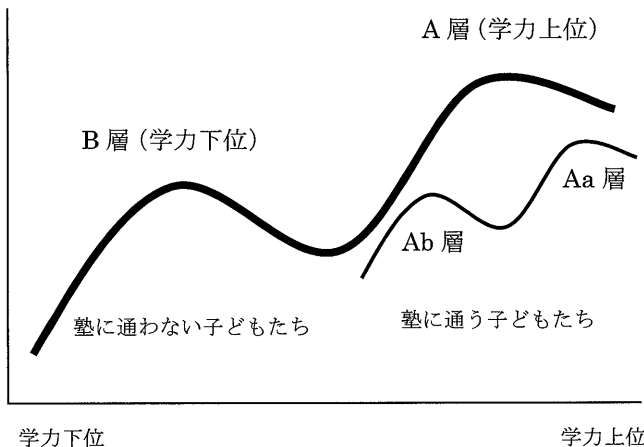


図3 現代の子どもたちの学力分布における二極化傾向のモデル

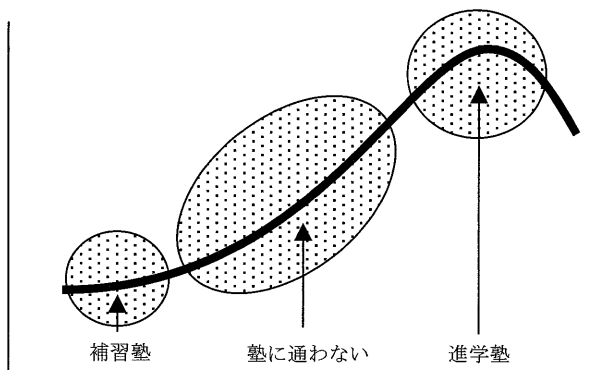
ようだ。

このように考えると、塾に通う子どもたちの変化に合わせて、塾のもつ機能そのものも大きく変わりつつあることがわかる。以前ならば学力の二極化の両端にそれぞれ塾に通う子どもたちが存在していたが（図4参照）、時代が経過するとともに通塾者の層が右にずれ、それに対して、塾に通わない子どもたちが左にずれてきたのである。学力が二極化する以前であれば、子どもたちの学力は正規分布に近い形態を有しており、進学塾に通う子どもは右端に、補習塾に通う子どもは左端に、塾に通わない子ども達

はその中間に位置していたと考えられる。

これは、これまでの子どもの学習時間が学力に影響を与えるという荻谷の調査結果とも合致している。しかし、現代においては、塾に通う子どもたちは進学塾であれ、補習塾であれ右側に集中してしまった。塾に通う子どもたちが学力上位層にとどまると反対に、塾に通わない子どもたちはモデル図の左側へと追いやられ、学力下位層になってしまったのである。（図5参照）

ゆえに、塾に通うことが子どもたちの学力形成に対して以前よりもまして強い影響をもち



学力下位 学力上位  
図4 これまでの子どもたちの通塾・非通塾に関するモデル

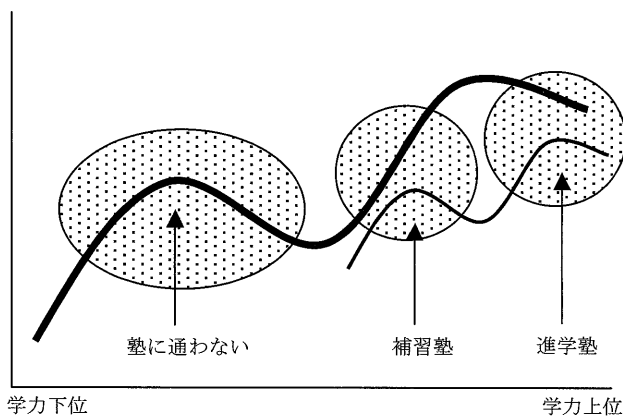


図5 現代の子どもたちの通塾・非通塾に関するモデル

じめたのである。そればかりか、まったく勉強しない子どもたちは、塾にも通わないようになり、学力を大きく下げてしまったのである。

学力が階層格差と相関関係にあることは先行研究からも明らかであるが、学力はすべての子どもたちにおいて低下したのではなく、塾に通わない子どもたちを中心に低下したのである。これは、学校において、すべての子どもに目配りする教育力が低下したと換言することもできよう。こうした議論を受けて文部科学省は、「ゆとり教育」から一転して「基礎・基本の徹底」という学力向上の方向へと再び舵を切った。それによって学力下位にある子どもたちにもう一度学びの必要性を取り戻すことが期待されているが、それは非常に難しいと言わざるを得ない。ひとたび、学びから逃走してしまった子どもたちを、再び学びの世界へ誘導するためには、小手先だけの改革でなく、かなり大がかりな「仕掛け」が必要だからである。

付記：本研究は、教育実践学会第8回研究大会(2005.11.6、新潟大学教育人間科学部)における発表をもとに執筆したものである。

なお本稿は、抄録、Ⅰ、Ⅳを原が、Ⅱ、Ⅲを山崎が担当したが、その責任は両者が等しく負うものである。

- (注1) 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレットNo.524 2000  
(注2) 山内乾史・原清治『学力論争とはなんだったのか』ミネルヴァ書房 2005 pp.14~43  
(注3) 小宮山博仁『塾』岩波書店 2000 pp.98~103  
(注4) 山内・原、前掲書、p.92  
(注5) 小宮山、前掲書、p.121

#### 【参考文献】

- 荻谷剛彦・志水宏吉・清水陸美・諸田裕子『調査報告「学力低下」の実態』岩波ブックレット 2002  
橋本健二『階級・ジェンダー・再生産』東信堂 2003  
市川伸一『学力低下論争』ちくま新書 2002  
荻谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店 2004

- 橋木俊詔編著『封印される不平等』東洋経済新報社 2004  
中井浩一編『論争・学力崩壊2003』中公新書ラクレ 2003  
志水宏吉『公立小学校の挑戦』岩波ブックレット 2003  
荻谷剛彦『なぜ教育論争は不毛なのか』中公新書ラクレ 2003  
荻谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書 2002  
佐藤俊樹『不平等社会日本』中公新書 2000  
山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房 2004  
山内乾史・原清治『学力論争とはなんだったのか』ミネルヴァ書房 2005  
小宮山博仁『塾』岩波書店 2000  
西村和雄編『学力低下が国を滅ぼす』日本経済新聞社 2001